

いわゆる「ターヘル・アナトミア」

と解体新書の比較（その三）

酒井 恒

解体新書卷之三の内容をいわゆる「ターヘル・アナトミア」のそれと比較し、主な相異点のうち、一部を記す。

第十三表 胸についての項では、乳房の説明中「未有婦人有児而無乳汁者也」は原典にはみられず、敏感の内容を「其汁滿則先知於此」と訳し、乳輪の意義を「乳頭居其中而似使之結束於此也」と誤訳し、横隔（膈）膜のはたらきの訳「佐腸胃之運化也」はわかりやすい。横隔膜の記載を「其膜之周圍有薄肉為緣又有円筋幅之」と誤訳し、縦隔（縦膈膜）が胸の中隔であることを訳していない。

第十四表 肺についての項では、その形状のうち犍牛蹄についての注はおもしろい。縦隔が肺を左右に分けることを「裏肺之二大葉者縦隔膜也」と誤訳し、「左右各分裂而為二或為三」は原意よりも明解で、肺を囲むもののうち胸

骨を肋骨と誤訳し、また、気管の各部のラテン語名及びアダムのりんごを訳していない。「肺管為岐者直内于両肺分而為多支」、「能使肺脹」及び「其血脈是使從心右方所受之血入於心左方也肺於是乎養焉」は原典にはみられない。肺のはたらきの一部は原意よりも詳しく、一部は簡潔に訳してある。

第十五表 心臓についての項では、円錐（圭錫縷）の注はわかりやすい。心臓が強い筋線維からなることを訳さず、両心耳の構造を「左右各有所主」と誤訳し、中隔の溝に「二条言如桃子去核之状」と注解を加えているが、心膜のはたらきについての訳は内容が不十分である。「如循環無端矣」は訳が原意とは少し異なる。弁の開閉の説明は原典にはない。

第十六表 大動脈（動脈）についての項の「其微細而不可名状者不準于此矣」、「名日弓」及び「又其支別者從之至腕」は原典にみられず、外頸動脈（鳥胃外脉）の記載中「上行絡腦而至舌」は誤訳である。腹腔動脈（胃脈之幹）の「別而行左右其右行者」は原意よりも詳しい。腸骨動脈（腸骨脈）の記載は原意とは少し異なる。内、外両腸骨動脈の個々の

枝を説明せず、大動脈のはたらきの一部を訳していない。

第十七表 大静脈（血脈）についての項では、静脈を動脈とは逆（の方向）に取り扱うということを「蓋動脈者順行血脈者逆行矣」と誤訳し、肩甲静脈（胛骨脈）と腋窩静脈（腋脈）の訳は原意とは少し異なる。オランダ語の直訳（頭脈、肝脈、母脈等）は各所にみられ、訳は正しい。内腸骨静脈（腸骨内脈）の訳は原意よりも詳しい。大静脈のまとめの訳は原典の記載とは異なる部分が多い。

第十八表 門脈についての項では、門脈の名称の由来についての注はわかりやすい。門脈が腹部内臓からの血管が合流し、肝臓内で再び分枝することを「其支入肝者與血脈微細者交也」と訳し、小児の門脈と臍静脈の記載は原意とは異なる。短胃静脈の記載では腸と胃を誤記し、腸間膜静脈の訳は原意よりもわかりやすい。門脈のはたらきについての訳は原意とは少し異なる。

第十九表 腹についての項では、白線（白糸）の役目を誤訳し、腹膜（并私沙屈）及び腹膜突起（腹縦膜）の訳は原意とは異なる。大網（腸網）の一部を訳さず、そのはたらきについては、「主……與膽之黏稠及為飲食消化之一助也」

と訳の方がわかりやすい。腸及び腸間膜の説明を訳さず、腹の役目についての訳は原意とは異なっている。

第二十表 食道、胃及び腸についての項では、噴門の記載は「貫横膈膜也神經多居此故知寒熱」と原意とは異なるがわかりやすい。幽門の形については「其状如鑿口」を追加し、S状結腸のSの字の注解は当時の世情を示している。腸のはたらきはよく内容を理解した訳である。

第二十一表 腸間膜と乳び管についての項では、上部三個の腰椎を第三腰椎と誤訳し、腸間膜の区分を簡潔に訳し、「加蠟垂古」の訳はよくその意を表わしているが、そのはたらき及び腸間膜腺の説明を訳さず、乳び管とリンパ管の関係を「又有水道者」と誤訳し、乳び槽（奇纒科白）の位置の記載は原意よりもわかりやすい。胸管の開口部及び半月弁のはたらきについては訳さず、腸間膜の意義を「主維護腸使物無滯滯於此也」と内容物の移動に注目して訳している。

第二十二表 脾臓についての項の一部を訳していないが、特記すべき誤訳はみられない。一部には訳していない部分及び誤訳と思われる部分もあるが、重大な誤りはほと

んどみられず、ラテン語用語はこれを理解し得なかつたようであるがオランダ語用語はこれを正しく訳し、また、他の図書を参照して注を加えるなど、読者に本書の内容を理解させようとする努力が各所にみられる。

(名古屋大学医学部解剖学第一講座)

稲村白羽(三伯)の「金匱方註」について

中山 沃

先年演者は稲村白羽(三伯のあきな)述の写本「金匱方註」一冊(一九・五×十三・四四)を入手した。一頁十行で、杏樹堂とした野紙に書かれている。そして凡例七枚、目錄二枚、本文四七枚、計五六枚である。凡例の文末に「于時天明四年甲辰季冬、因幡州稲村白羽誌」と書かれている。卍は村で、白羽は三伯の字、季冬は十二月である。

「目錄は処方目次で、五三の煎薬と一つの丸剂名が書かれている。本文第一頁の一行目に「金匱方註卷一、因幡州稲村白羽述」とするされ、桂枝湯方以下五四の処方の成分とその割合、方の趣(効能、適應症)が、三伯自身の考も入られて書かれている。そして末尾に「新撰金匱方註卷一終」とあり、以下続巻があることを思わせる。なお凡例の第一頁欄外に「石田」と「窟」の二つの朱印が押し、裏